

女性のための講演会シリーズ 7

女 性 の 生 き 方

講 師 馬 居 政 幸

と き 平 成 4 年 6 月 9 日
と ころ 浜 松 市 青 年 婦 人 会 館
主 催 浜 松 市 教 育 委 員 会

目 次

はじめに	1
一、団塊の世代の男性と女性	2
二、八〇年代の「女性の時代」の背景は	7
三、九〇年代を「男性と女性の時代」に	11
四、男女共同参画型の社会にむけて	14
五、これからの問題——人生のパートナーとの新たな出会いを	18

はじめに

本日、私にあたえられた課題は「女性の生き方」ですが、男である私が、女性の生き方とはかくあるべきだ、といったことを講義することはとてもできません。ただ、女性は男性に対する言葉です。その意味で、女性がどう生きるかという問題は、男性がどう生きるかという問題でもあると思います。そこで、女性のみの生き方や男性のみの生き方ではなく、男性と女性の関係のあり方という観点からしたら、男の私でも女性の生き方についてお話できることがあるのではないか。こんな思いでこれから始めたいと思いますのでよろしくお願ひします。

ところで、一口に男性と女性の関係のあり方といっても、そのパターンはさまざまだと思います。夫婦ゲンカは犬もくわない、なんて言われますように、いわば男女のペアの数だけあるといっても過言ではないでしょう。また、女であるから、あるいは男であるからこういう生き方をしなければならぬ、という決められたパターンもないと思います。

しかし、世代によって、おおよその傾向があることも確かなようです。特に、日本の場合、私のような昭和二十二、二十三、二十四年生まれ、いわゆる団塊の世代をばさんで大きく別れると思います。加えて、団塊という言葉が示しますように、私の世代は非常に数が多いことから、戦後の日本の時代や社会の傾向は、団塊の世代の成長とともに変化してきたと言えます。

ます。

そこで、これからの男性と女性の関係のあり方を考える手順として、まず団塊の世代が育ってきた過程をたどってみたいと思います。その次に、男女雇用機会均等法の施行を代表に「女性の時代」といわれた一九八〇年代後半の男と女の関係について考えてみます。そして、九十年代に入った現在において、新たに生じつつある問題点を指摘しながら、「男女共同参画型社会」を実現する上での課題について、私なりの考えを提示していきたいと思います。

一、団塊の世代の男性と女性

昭和二十年代前半に生まれた団塊の世代は、日本の高度経済成長とともに育ってきた世代です。そのため、成長の節目ごとにさまざまな流行語が生まれ、その行動が問題視されてきました。

たとえば、昭和三十年代、小学校に通うようになった団塊の世代に対して与えられた言葉が「現代っ子」でした。また、現在のマンガ文化の始まりである少年マガジンと少年サンデーが創刊されたのが昭和三十四年です。そしてそれはテレビ文化の始まりでもありました。テレビのコマーシャルを通じて、マーブルチョココレートを代表に子供を消費対象にした商品が次々と売り出され、子ども文化が論議の対象になりました。

さらに、団塊の世代が中学から高校に進学するころから高校増設運動が始まりました。高校を卒業し大学に入って起こしたのが学園紛争です。この世代から大学の大衆化が始まります。女性が高学歴になる最初の世代でもあります。

その大衆化した大学生が卒業する時期にオイルショックが日本を襲ったわけです。

戦後の教育改革により男女共学になった後に生まれた団塊の世代の女性は、男と女という性差ではなく、個人の能力（学校の成績）により評価されるようになった最初の世代といえます。「女のくせに」という言葉を拒否し、「男に負けたくない」という思いで、多くの女性が、小・中・高・大と学校教育の段階を登ることが可能になった世代です。このように育った女性が大学に入って、男と一緒に世の中の矛盾を感じて運動を起こしたのが大学紛争だったわけです。しかし、その運動が終わり、卒業して社会人となったときにオイルショックが起こり、日本の経済は低迷期に入りました。

昭和二〇年に戦争が終わり、外地から引き上げてきた人達も含め、数多くの男女が平和になった日本で結ばれ、次々ともうけた子どもが団塊の世代です。親たちは、食うことだけが精一杯という時代の中で、彼ら彼女らを育てざるを得ませんでした。しかし、多くの親は、これからの時代は男も女も教育が必要と考え、女性が高校から大学へと進学することにも、それほど反対しなくなっていました。そのため、団塊の世代は男女の関係について、考え方は平等志向の方が多いはずですが、しかし、生き方は自分たちが育った世界、それは、戦前の

家父長制に支えられた男尊女卑的文化の中で自己形成を行った親が作った家庭ですので、かなり保守的でした。

大学を出るまでは、男女平等であっても、社会に出て自分たちが家族を作る側に回った時に、やはり自分の親の生き方を踏襲せざるを得なかった訳です。

このような団塊の世代がつくった家族に与えられた流行語が「ニューファミリー」でした。家族写真イメージは子供をはさんでにやかに平等に並ぶ夫婦。しかし、実際の生活では、女性の役割は家庭の中で妻として夫を支え、母として子どもを育てること。男性の役割は家庭の外で妻と子どもを養うために一生懸命仕事をする事。これがニューファミリーの実体でした。夫婦は平等であるという意識は親の世代と異なるものの、その意識は性別役割分業を実際に変化させるまでには至らなかったわけです。その背景には、一方で、オイルショックの中で男は働き続けなければならず、他方で、企業の方は女性を受け入れる準備ができていない、という社会事情がありました。団塊の世代の女性の大多数は、結婚を契機に、あるいは子どもが生まれるとともに、退職し主婦として子育て専従になるしか道がなかったといえるでしょう。

意識は平等でも、生き方は性的役割分業を容認せざるを得なかったのが団塊の世代の女性です。

しかし、その女性たちも三十代半ばを越え、自分の生活を振り返る余裕を持てる時代がき

ました。子どもが小学校や中学校に通うようになったからです。そしてその時代は、一九八〇年代後半の女性の時代と重なることになるわけです。

もっとも、団塊の世代の女性の全てが政治運動に参加したわけではありません。むしろ余裕ができた時間を利用して、多くの方はパートに出ました。その動機の大多数は、高学歴社会で自分の子どもが落ちこぼれないように、せめて塾の費用ぐらいいは自分でなんとかしなければ、ということであったと思います。一九八〇年代に女性の就業率が高まった背景の一つです。

他方、この世代がつくった家族の多くは都市の核家族です。それは、親戚縁者から切り離された未経験な一組の夫婦で、それも実質的には母親のみで、子どもを育てなければならぬことを強いられた家族です。しかし、都市はモータリゼーションと情報化が高度に進んだ社会でもあります。母親たちは、子育てにともなう問題を問いかけ、悩みを語り合うために、互いに気の合う人達が電話や車を利用して連携を取り合い、グループを作っていました。さらに、子どもの成長とともに、子育て以外にも活動の枠を広げ、さまざまな他のグループと知り合い結び付いていきました。その中にパートで知り合った仲間も加わりました。女性によるネットワークの誕生です。

それが一九八〇年代の半ばだったわけです。そして、消費税反対に沸くおたかさんブームの時代と重なりました。「世の中は、やっぱり男に任せておいたら駄目だ。」と、自分の子ど

もを育てるために広げたネットワークを通じて女性が一斉に発言を始めたわけです。

もともと、男女平等で育った世代の女性です。少なくとも、学校という世界では、男と女という性差による差別をなくすことが重要と教わり育った世代です。また、実際に学校の成績という意味では、性差と能力差は関係なく、むしろ同年令の男の子の幼さを、実感して育った最初の世代です。ただ、社会に出たあと、さまざまな仕組みの中で、やっぱり「男は強い、偉い、だから私は家庭で支える側に」というふうに思い（思わされ?）、子どもを育ててきました。

ところが、子育てを終えて世の中を改めて見直したら、どうも問題が多すぎる。やはり男だけにまかしておいたら駄目、男が偉いと思ったのは、幻想だったのかもしれないわ、それならどんどん意義申し立てをして変えていかなければ、と考えたわけです。ただし、それは従来のイデオロギーにこだわる政治的なものではなく、一人ひとりの生活実感をもとにした発言でした。

これが一九八〇年代後半の女性の時代を演出した意識ではないでしょうか。もっとも、女性の時代を切り開いたのは、おたかさんに代表されるように、団塊の世代よりも上の世代の女性です。戦後の婦人運動を担ってきた方たちです。その意味で、この人達を押し上げバックアップをしたのが団塊の世代の女性といった方がより正確かもしれません。

さらに、このような女の時代をより広い基盤で支えたのが、パートからフルタイムまでさ

さまざまな形態で職場に進出した多くの女性であり、それを必要とした一九八〇年代に生じた日本の社会の変化です。

二、八〇年代の「女性の時代」の背景は

先に、団塊の世代は高度成長とともに育ってきたと述べました。一般に、日本の高度成長の特色は「重厚長大」といわれます。鉄鋼、造船、石油プラントなど重くて厚くて長くて大きいものの生産を中心とする経済成長であったからです。それに対して、女性の時代の基盤となった八〇年代の経済成長は「軽薄短小」という言葉で総称されます。コンピューターを駆使する先端技術、ハイテク化、サービス産業化が特色だからです。

この時代を象徴する出来事は、家庭にビデオやファクシミリが入ってきたことです。レンタルビデオ店が急増し始めるのが八〇年代半ばです。大型テレビやコードレス電話が普及し始めたのもこの頃でした。いずれもハイテク製品といわれるものです。

そしてハイテク製品を生産するのは、やはり産業ロボットに代表されるハイテク機械です。人間の力が必要なのは、製品を流通させて販売することです。それは生産ではなく営業の世界です。営業というのは売る相手に合わせて行動しなければならないはずで、買ってくれる人のいる時間と場所に行かなければならないはずで、コマーシャルで有名になったリゲ

インの世界、「二十四時間働けます」という世界になるわけです。その結果、男性は家に帰って来れなくなってしまいました。

ではその男性の妻である女性はどうしたか。先に述べましたように、多くの母親は、わが子を学歴社会の落ちこぼれにしないための教育（塾）費をかせぐためにパートに出ていきました。ハイテク商品あるいはそれを作るハイテク機械の核は、軽くて、薄くて、小さくて、短い、すなわち軽薄短小のＩＣ（高度集積回路）です。それを作り、あるいは商品として組み立てるのは機械。その機械を操作し管理する仕事が女性のパート労働の代表です。そしてつくられた製品を売るために、スーパーをはじめ流通産業が飛躍的に拡大したのも八〇年代でした。そこでも女性のパート労働が必要でした。

女性の側は母親として子どもの教育費用の足しにするために、企業の方は安い労働力を確保するために、と両者の利害が一致することにより、低賃金の女性のパート労働が増加し、それにより支えられたのが八〇年代の経済成長でした。ただし、それは母親が女性にもどって社会の出来事に直接ふれる機会を用意することでもありました。

この現象をとらえて、社会学者でありフェミニズム運動の旗手としても話題になることが多い上野千鶴子さんが、ある本で「女の時代を作ったのは女性運動ではなく、むしろ企業である。」と自嘲気味に書いていたことを思い出します。

また、上野さんは、同じ本で、兼業農家との比喻により、主婦である女性を第一次兼業主

婦、第二次兼業主婦、専業主婦の三つに分けて女性の時代を分析しています。

上野さんによれば、第一次兼業主婦とは「主婦業という仕事为主でそれ以外の仕事に従である女性、これがパート労働に従事する女性です。第二次兼業主婦は、主婦業の方が従になる方たち。これがフルタイムで働く女性です。そして全く働かなくてすむ女性が専業主婦です。さらに、このような三つのグループのいずれに属するかは、実は、女性の主体的意欲というよりも、夫になる男性の年収によって決まると分析しています。

全く働かなくてよい文字通り主婦に専業する女性の夫の年収は、確か七〇〇万から八〇〇万円以上であったと思います。パートに出る女性の夫は五〇〇万から六〇〇万円夫の収入だけでやっていこうと思えばいけるのだが、ちょっと余裕がないからがんばろうという人たちです。それ以下が第二次兼業の主婦になるわけです。もっとも、この本を読んでからかなり時間がたっていますので、現在の水準ではもっと上がっているかもしれません。

ところで、女性が結婚をして子どもを生んでもフルタイムで働き続けることが可能な三大職業として、教師、公務員、看護婦が挙げられることが多いと思います。この職業は、いずれも高学歴の女性が多いわりには給料が安いはずで、そして、この方たちの夫になる男性も同じように公務員とすれば、二人の給料を合わせることに、ようやく専業主婦の層の年収と重なるわけです。

女性が自己実現のためにフルタイムで働くではなく、共稼ぎをしなければ余裕をもてない

というのが、多くの第二次兼業主婦の実感ではないでしょうか。

その一方で、妻を専業主婦にすることのできる年収を得ることが可能な職業に就いた夫の労働時間は大変なものになるはずで、逆に、公務員は収入が少ないかわりに労働時間の方はそれほど多くないはずで、一方は、収入は多いが生活の世話を専業でしてくれる女性がいなければやっていけないような家庭、他方は共にフルタイムで働くことはできるが片方の収入のみでは生活が苦しい家庭、というわけです。

余談になりますが、その意味で、夫が公務員でありながらパートもせず専業主婦を続けている奥さんは偉いと思います。少ない収入をやりくりしているはずだからです。

これが日本の社会の仕組みです。

ところで、高収入を得る職業につく男性は一般に高学歴であり、その男性を夫に持つ専業主婦になった女性もまた高学歴の方が多くは、他方、フルタイムで働く第二次兼業主婦になった女性も一般に高学歴の方が多くといえます。

この高学歴で専業主婦になった方が創造し広げた女性のつながりが、先に述べた女性のネットワークでした。この方たちが女性の時代の表の顔です。このネットワークによる活動や運動に呼応して参加したり、心情的にエールを送って支えたのがパートに出た多くの女性たちです。そして、公務員になった第二次兼業主婦の女性が、ネットワークの核となった専業主婦の人たちと連携をとりつつ進めたのが、行政における八〇年代の女性施策であり、各種女

性行動計画の策定といえないでしょうか。

浜松の場合はどうでしたでしょうか。ここで今こうしてみなさんが学習していることが、私のこのような図式に当てはまらないでしょうか。

三、九〇年代を「男性と女性の時代」に

それでは、このような八〇年代後半の女性の時代は、九〇年代の現在、どのような状況にあるのでしょうか。どうも私の個人的な見方ではありますが、一つの壁にぶつかっているように思えてなりません。

少し話が大きくなりますが、一九八九年にベルリンの壁が崩壊して以後、世界は新たな秩序を模索する巨大な変動期にあると思います。日本も例外ではありません。というよりはむしろ、新たな世界の秩序を作ることに関心を持たねばならない立場に立たされているといえます。このような日本の現状の中で、八〇年代後半、女性の時代の波に乗って社会に進出した多くの女性のパワーは、どのように生かされているでしょうか。

これまで日本の社会において、長い間、女性が担って（割り振られて）きたのは家庭生活を代表とする日常の私的な世界でした。それに対して、男性が担ってきたのは公的な仕事の世界です。いわゆる性別役割分業の世界です。それが、八〇年代を通じて女性がどんどん職

業に就いたため、女性は私的な世界も公的な世界も分かるようになりました。

世界の秩序が比較的安定していた八〇年代の問題は、日本の国の中の日常生活をどう豊かにするかということが中心でした。男は、それまでの性別役割分業の文化のために、この日常的で私的な世界のことがよく分かりませんでした。その結果、企業の経済戦略においても、行政の新たな施策立案においても、女性の発言が重要な価値を持つようになりました。自分よりも劣っていると思っていた女性の方が、より多くの情報と時代の要請に適合した意見を持っているということが分かった時の男性の驚きととまどいが、一九八〇年代の女性の時代の引き金だったといえるかもしれません。

しかし、世界の秩序を新たに創造しなければならない時代に入って、改めて現状を評価するとき、残念ながらこの創造の世界を担う女性が非常に少ない、と考えるのは私一人ではないと思います。もちろん、このことは、男性の方に能力があって女性に能力がない、ということの意味するものではありません。世の中をつくりかえる能力を持ち、それを可能にする立場を与えられた女性が、さまざまな分野で育つ前に、世界が大きく動き始めた、というべきでしょう。あるいは、長い性別役割分業を前提とする社会の歴史の過程で、女性にそういう場が与えられず、したがって能力を培う機会もなかったといった方がよいかもしれません。世界的変化の時代に入ったときに、外交官も政治家も企業のトップも男ばかりの世界であるため、必然的に表に出るのは男のみになってしまう、というわけです。

この問題を、もう少し身近な問題で考えてみましょう。

たとえば、男女雇用機会均等法が施行された後、この法律を活用して多くの女性が企業に入りました。しかし、企業の方では女性の扱い方が分からず、結局、男性と同じように働くことを要求しました。女性もそれに応じて懸命に働きました。しかし、女性と男性は生理現象が異なります。そのためさまざまな予期せぬ問題が生じてきました。

男に許された権利が、なぜ女に許されないのか。これが婦人問題であり、男女平等の考え方の基本にあります。だけど、実際には、あえていうまでもなく、男性と女性とは異なります。違うからこそ恋愛ができ、夫婦にもなるわけです。

法のもとの権利としては男と女は平等でなければなりません。しかしそれは男と女が全く同じになるということではない。男と女の違いを認めながら、家庭の中でも、外の社会においても、共に働き、共に子どもを育てることができる世界にしよう。そのために、男の世界に女が、女の世界に男が相互に乗り入れ互いに知り合うことから始めよう。

これが「男女共同参加型社会」を提起した意義だと思います。男と女は全く同じではないから、一緒に仕事も、結婚も、子育てもしよう、というわけです。

しかし、実際にそれまで男のみの世界であった場に女性が入ってくれば、やはり不適切な部分が明らかになったわけです。さらに、女性が仕事も、結婚も、子育てもということになれば、そのパートナーとなる男性の方が家庭に帰ることができる条件を整えなければならな

かったにもかかわらず、そちらの方はあまり変化しないままにきてしまった、というのが現実だと思います。その結果、全体として、家庭の外に出る女性が増えたものの、男性は家庭に帰ることができず、両者のバランスがくずれ摩擦が生じている、と表現できるかもしれません。

企業の方も、入ってきた女性の能力を上手に引き出す仕組みを生み出せないまま不況の時代を迎えてしまい、どうすればよいか迷っている。あるいは、男のみが二十四時間働くことを前提とした仕事の仕方や職場の習慣を変えないまま、女性を職場に受け入れたため、男の側も女の側も戸惑ってしまった。それでも、なんとかしなければと思うところまではきた。ところが、それを実行に移そうと準備をしていたら、さらに大きく世界の変化が始まってしまい、身近な世界を改革する余裕を失ってしまった。これが現状ではないでしょうか。

四、男女共同参画型の社会にむけて

男が女になるでもなければ、女が男になるのでもなく、男と女がお互いの違いを生かし合いつつ、共に生きていけるような社会にするために、男と女が協力して問題を一つ一つ解決していきましょう。あるいは、男と女が共に生きていくことは、必ずしもいいことばかりではなく、むしろ大変な事が多いかもしれない。でもそれ以外の道がないのだから、共に悩ん

で新しい男と女の関係を創造することから始めましょう。これが男女共同「参画型」社会の理念だと思っています。

私の個人的な感想ですが、「参画型」社会が提起されたときには、希望や夢や理想に溢れていたと思います。ところが、その理想が少しは現実となった時に、夢はさまざまな困難な問題にとってかわられました。これが「参画型」社会の基盤であり、現在の男と女の間を巡る新しい状況ではないでしょうか。

それに対して、「そんなに苦労するのなら、やはり、専業主婦の方がいい」と、戦線離脱をするのか。改めて、自分の足元を見つめ直し、男性と女性いづれかが主になるのではなく、共に生きるための新しい仕組みと生き方を創造する道を選択するのか。これが、二十一世紀を目前にした現在の男性と女性の関係のあり方を考えるポイントだと考えます。

最近、四十歳前後の主婦から、「もう、夫の世話はいきいきした。これ以上は面倒見切れない。」という話を聞きました。また、自営業の女性から、「時代の流れに応じて新しい展開をしようとしても、夫は保守的になり賛成してくれない。いくら言ってもだめだから、別の道を歩いた方がいいのではないか。」という相談を受けました。

六十歳過ぎの定年を迎えた女性が、「退職金を半分貰って、やっと人生の苦痛から開放された。これからは自分のために生きる。」と宣言して夫と離婚し、生き生きと一人で暮らしているという話も聞きました。

自分の生き方、自分の世界は、夫とは別の所に作った方がよいのでは、と悩んだり、夫に合わせて我慢するよりも自分一人で生きていった方が自由になれるのでは、と考える女性が増えているのかもしれませんが。このように女性が考えるようになった責任の大半は、間違いなく男性の側にあると思います。しかし、男を変えるのが面倒だからといって、女は女で生きていくと開き直ってやっていけるほど、これからの社会は甘くない、これが私の考えです。事実、あれほど好景気であった日本経済も、現在、非常に深刻な不況に陥っていますが、それを反映してか、最近、企業が一齐に女性の採用を控え始めたということを、友人の就職情報関係誌の記者から聞きました。これほど日本の企業が男性中心とは思わなかった。あの八十年代後半の女性進出は何だったんだろう、という感想をその記者が溜め息まじりにもらっていました。

もちろん、記者の溜め息は、女性を調整労働力としてしか位置付けず、あくまで男性中心に考えようとする企業のあり方への非難を込めてであります。しかし、私はこの話を聞いたときに、先の「女は女だけで」という開き直りと同じものを感じました。女性の方が女は女だけでと開き直るのと同様に、企業の方は男だけで、というわけですから。

男も女も、困難な壁を越えることよりも、それぞれ居心地のいい元の世界に戻った方がよいのでは、と思っているといえはいいすぎでしょうか。

先に述べましたように、残念なことですが、日本の企業の多くは、今なお、女性が自分の

能力を十二分に生かして男性と共に仕事ができるための仕組みやルールを持っていません。しかし、その一方で、家庭の中では、母の世界はあっても、給料運搬人の役割以外に父の世界がどれだけあるでしょうか。家庭の方もまた、男性と女性がその違いを共に生かし合うためのルールや仕組みを持っておらず、それを創造するための努力も乏しいといえないでしょうか。

男中心の社会というのは、裏返せば、母親中心の社会だと思っています。さまざまなことがあっても、女性は母である限りにおいて、男性は仕事人である限りにおいて安住してきたのが日本。これまでの男性と女性の基本的な関係であったと思います。この歴史を再び繰り返すのでしょうか。

私の答えははっきりしています。それは不可能です。歴史の針は逆転できません。男と女が、その性差を理由に、母親と仕事人に分業してやっていけるほど日本の社会の未来は甘くありません。確かに、現在是不況のために、女性の雇用事情が悪化していることは事実です。しかし、いずれ不況が終わり景気が回復すれば、再び労働力不足が生じるはず。逆に、もし不況が回復せずに収入が減り、首切りがはじまれば、その男性の妻も生活のために、どんなことをしても働かなければならないはず。

さらに、景気の動向がどうであれ、日本の社会は急激に高齢社会に移動しています。それを少子社会が追い打ちをかけています。もし、日本が現在の豊かさを維持しようとするなら

ば、労働力は絶対的に不足することは明らかな事実です。男も女も老いも若きも働かなければ社会を維持できなくなる時代、それが二十一世紀の日本だといっても過言ではありません。しかし、だからといって、家庭を顧みず子どもを育てることを放棄したり、大変だから子どもを生まないという選択をすれば、困難に拍車をかけるだけで、もっと厳しい社会が待っています。みんなが働く社会は、みんなが次の世代を育てる社会でなければ消滅するしか道はありません。

男女共同参画型社会は、理念の問題というより、日本が豊かな社会であるために必然的に選択しなければならぬ方向だと考えます。

しかし、残念なことですが、経済も政治も今なお男性中心のシステムであり、それを変えることはなかなか容易ではありません。その壁を前にして、女性の方も、それなら私たちがだけで、と開き直ったとしても、問題の解決にならないことは明らかです。

そこで、もう一度、ある女性の時代を築いたネットワークを、改めて新たな共同参画を可能にする社会に変化させる方向に張り直してほしいのです。

五、これからの課題 ― 人生のパートナーとの新たな出会いを

女性が子育ての過程で生じる問題点を互いに解決し合うために作ってきたネットワークが、

女性の時代を創造しました。今度は、その子どもたちが大人として生きる未来をより豊かなものにするために、男性も含めたネットワークを創造して欲しいのです。

これまでのネットワークは、好きな人や気の合う人が互いに結びつくことによりつくられました。その結果、ネットワークというイメージとは逆に、気の合わない人を排除したり、一時は気が合ってもいやになると切ってしまうという傾向はなかったでしょうか。そのネットワークを外へ外へと広げて欲しいのです。いやな人、嫌いな人、気の合わない人にも、そして何よりも女性だけではなく男性とも結び合う努力をして欲しいのです。

子どもを育てるために自然発生的に手をつないだのがネットワークの始まりでした。そのノウハウを、男女が互いに学び合い、教え合い、支え合って、共に生きるための新しい時代と社会を創造するために生かして欲しいのです。

その第一歩を、最も身近な男性である皆さんの人生のパートナーから始めて下さい。そのためのヒントになればと思います、最後に私の友人の話を紹介したいと思います。男女共同参画型社会実現のスタートの場であるとともに、最終的なゴールの場でもあるのが、夫婦のあり方だと、私は考えるからです。

先日、私は小学校時代からの友人のアパートを訪ねました。単身赴任のために、大阪に家族を残して、結婚後はじめて東京に一人で住むことになったため、激励と冷やかしを兼ねて、東京での研究会に参加した後泊まりに行ったわけです。もっとも、その友人は大手航空会社

のフライトエンジニアであるため、多いときは月の半分近く、文字通り旅の空で過ごし、家庭に帰れない生活が続けていました。そのため、それほど心配していなかったのですが、やはり一人暮らしは大変であるとしみじみと語ってくれました。

しかし、単身赴任により一ついいことがあったというのです。それは、改めて夫婦で生きていく意味と価値を、奥さんとともに考え自覚することができた、ということでした。そのきっかけは、電話で語りかけてきた奥さんの次の言葉でした。

「あなたが東京に行っても、私の生活が何も変わらないことに気がついたの。私はあなたに何をしてあげていたのか…、あなたを本当に愛していたのか…、あなたの妻として反省したのよ。ごめんね。」

彼の子どもは高校三年と一年の二人の男の子、不規則な勤務で当てにならない夫に頼らず、奥さんは一人で家庭を守り子どもを育ててきたと思います。そして長男の大学受験を目前にしたときに夫の転勤が決まったわけです。本社勤務の栄転とはいえ、奥さんにとって大変なことだったと思います。ところが、実際に夫が転勤でいなくなるとして気が付いたのは自分の生活に何の変化もなかったということでした。この事実が、かえって人生のパートナーである男性との関係を新たに見つめ直し、その価値に気付かせたのです。そして、それを夫に語ったのです。その奥さんの言葉に、私の友人もまた人生を共有する女性の価値を改めて見出したのだと思います。

大阪と東京に離れた夫婦の絆を電話の線が新たに結び直したわけです。夫婦のネットワークの誕生です。

この話を友人から聞いたときに二つのことを思いました。一つは、夫婦の間にこそ新たなネットワークが必要なのでは、ということです。

先に、私は男性中心社会は母親中心社会であると述べました。この私の指摘が正しいとすれば、男性と女性の関係の変革は、まず職場よりも家族のあり方、特に夫婦のあり方から出発しなければならぬと思います。男性が家庭に戻らず働き続けるのも、女性が職場を捨てて母親であり続けるのも、自分の子どもを養い育てるためであることは共通しています。しかし、そこには父母としての男と女の関係はあっても、夫婦という関係はないといえないでしょうか。

一組の男女が父と母の顔だけで生活を共にするには八十年の人生は長すぎます。自分の夫との関係を、子どもの父親ではなく、人生のパートナーとしてどのように新たに創造していくか。これが、最も身近で最も重要で最も確実な、しかしあえていえば最も困難な男女共同参画型社会への第一歩であると思います。

夫との関係の変化は職場での働き方の変化に広がるはずですが、夫婦のあり方の変化は、子どもの生き方の変化にもつながるでしょう。そこからまた新たな変化が生じるはずですが。そして、文字通り人生のパートナーとの関係の変化に、人生の最終ゴールにおける男性と女性

のあり方の変化へと進んでいくはずですが。

もう一つは、自分に最も身近であるはずの夫との関係でさえ、意図的に働きかけなければ、新たな関係をつくることができず、さらに、二十年の夫婦生活でも気付かない人と人との間の関係がある、という事実です。友人の場合、毎日のように東京のアパートから大阪の我が家に電話をしたようです。多分、夫婦のコミュニケーションは、大阪にいたときよりも多くなったのではないのでしょうか。だからこそお互いの良さを新たに見出し確認することができたのだと思います。

改めて、生活の中で接するさまざまな人との関係を見直して下さい。長年生活を共有してきた夫婦でさえ、このような努力が必要であり、新たな互いの学びがあるわけです。さまざまな機会に出会った人の中に、ちょっと意見が合わないからといって、ネットワークの可能性を切り捨てていないでしょうか。自分を鍛え、成長させるチャンスを見逃していないでしょうか。

あえていうまでもなく、女性の生き方は、子どもを育てることのみではありません。さまざまな事情で結婚をされない方はおられると思います。子どものいない家庭もあると思います。最初に述べましたように、女性の生き方も、そして男性の生き方も、決められたパターンはないと思います。しかし、どのような人生を選択した方でも、さまざまな「人と人の間（あいだ）」で生活を築かなければならないことは共通のはずです。そして、そのさまざまな

人は男性であり女性であるはずです。

とすれば、二十年の生活を共有した女性に、新たな魅力を発見し、自分の人生のあり方を問い直すことができた、という私の友人の経験が教えることは、単に夫婦の関係の問題に止まることではないと思います。まさに「人として」のあり方の原点を教えてくれていると思います。

この浜松は、工業都市であるために、全国からさまざまな人たちが移り住んでくるはずで、日本のみでなく、異文化の国から家族とともに働きに来られる方がいます。家族を母国において単身で来られている方もいます。その一方で、風上げに象徴されるように伝統的な人間関係や文化が今なお息づいている都市でもあります。

古い文化と、新しい文化と、異なる国の文化が、それぞれの良さを生かし合い、互いに学び合い、教え合えるような人と人の間のネットワークを、ここに集われた女性の方一人ひとりが、自分の生活の場に帰られて、創造して行かれることを願って、本日の講義を終わらせていただきます。

講師プロフィール

一九四九年 徳島県鳴門市に生まれる。

東京教育大学 教育学部卒業

同大学大学院博士課程教育学研究科終了

職 歴 静岡大学教育学部助教授

教育学・社会学専門

静岡県青少年問題協議会委員

静岡県婦人問題推進会議委員

静岡県家庭教育企画会議副委員長

著 書 「二十一世紀を創る―男性と女性―」

(第三章 現代家族と婦人)

静岡県企画調整部県民生活局婦人課

「シリーズ教育の間9 教師と父母の間」

(第2章 学校教育の課題と家庭への期待)

ぎょうせい



あとがき

この冊子は、女性リーダー養成研修会で、馬居政幸先生が講義した内容に、自ら加筆訂正をされてまとめたものです。

馬居先生は、静岡県婦人問題推進会議の委員として、さまざまな場で、婦人問題について助言したり、コーディネートをしたりと幅広く活躍されております。そのような場で得たものとご自身の研究や体験を通して、変化する社会の中で女性がどのような生き方をしてきたかを、詳しく話されました。

今までの生き方と照らし合わせながら、この「女性の生き方」をお読みいただき、これから歩む人生の一つの指針にしていただければ幸いです。

終わりに、ご多用の中、研修会のために講義をお引き受けくださり、さらに、この冊子作成のために大変なご尽力をいただきました馬居先生に、心からお礼を申し上げます。

また、講義録の作成にご協力いただきました修了生の鈴木悦子さんに感謝いたします。

女性の生き方

平成5年3月

講師 馬居 政 幸
発行 浜松市教育委員会
女性施策課

浜松市元城町103-2

TEL (053) 457-2561